

# 東北 VALUE SIGHT 宮城



特定非営利活動法人 せんだい杜の子ども劇場  
代表理事  
**齋藤 純子** (さいとう・じゅんこ)

榴岡児童館館長。  
地域社会との「顔が見える関係」が子どもの育ちと子育て支援には必須であるという自負の基、メンバーの心意気とモチベーションの高さで「チームせん杜」は頑張っている。  
仙台市立寺岡小・中学校の父母教師会長、宮城教育大学非常勤講師等を歴任。現在、仙台市自分づくり教育研究会委員、宮城県文化芸術振興審議会委員等を務めている。

特定非営利活動法人 せんだい杜の子ども劇場  
宮城県仙台市泉区泉中央4-17-1  
TEL 022-375-3548 URL <http://senmori.org/>

仙台を拠点に、舞台芸術鑑賞や体験イベントを通じて子どもたちの豊かな感性や創造性、社会性を育む活動を続けている「特定非営利活動法人 せんだい杜の子ども劇場」。現在は地域の児童館や児童クラブの運営にも取り組み、子どもたちの豊かな成長をサポートする場はさらに広がりつつある。

子どもたちが、そして大人たちも人間としての感性やお互いを認め合う心を大切に豊かな社会を実現するべく、齋藤代表理事と「チームせん杜」は奮闘している。

## 子どもたちの未来が輝くように ～感性を、人間力を高めよう～

### 「せんだい杜の子ども劇場」の生い立ち

現在のNPO法人となったのが2006年4月、今年で12年目を迎えた。それ以前は任意団体、さらに遡ると仙台市内の3子ども劇場が合併したところから始まる。

さて、「子ども劇場」は全国各地にあるが、今から半世紀前に福岡で産声を上げ、「子どもたちが子ども時代を心豊かに過ごせる環境づくり」を合い言葉に、子育て中の母親だけでなく驚くことに大学生が、その立ち上げの中心を担い牽引し全国に広がっていった。子どもの感性と創造性を育み、異年齢の子どもたちが集い子ども文化に触れることを通して目指してきた「思い」は、今も変わらず引き継がれている。

子ども劇場は「子どもの劇団?」、「鑑賞団体だね」と聞かれることがよくあったが、福岡で産声を上げた当時の先輩より、劇場の意味は「皆が集うひろば」と伺ったことがあり、当初から地縁の他に思いでつながる「親子が集う場所」だった事に合点がいったことを覚えている。

### 活動の柱&事業内容

当法人は仙台圏で「せん杜」の愛称で呼ばれている。せん杜では、①親子での芸術鑑賞体験、②子どものあそびを通したリアル体験、③子育て支援が大

きな柱となっている。①は子どものために作られた舞台劇やコンサートを実施することで人間の表現力や感動することを親子で共感し心の糧とする、②は異年齢の子どもが集い自然の中や、さまざまな大人から学ぶ体験から子ども同士のコミュニケーション力や自己肯定感を高める、どちらも子どもたちが感性を磨き表現していくことが肝心で、子どもの参加から「参画」へつながる場所と捉えている。毎年実施している「杜の子まつり」や「子育て応援フェスティバル」そして和太鼓ワークショップは、舞台芸術や日本伝統芸能に触れ、楽しみながら子どもや家族が集い、親子が達成感や自己肯定感を高め合う場になっている。

そして③は、子どもが輝くためには親への支援を忘れてはいけない！親の自己肯定感を高める場所が必要であるとの思いから行っている。

傾聴電話「ママパライン仙台」は、子育て中のママパパからの電話を受けている。名乗る必要はなく、内容は不安なことや愚痴など、何でもOK。話すことで、自分を整理し気持ちが上向きになり「また子育て頑張ろう!」となってもらえるよう寄り添う電話だ。毎月1回実施している「杜の子さろん」には平均15組の親子が集まり、ママたちが気持ちをゆったりできる場としてスタッフは寄り添っている。

### 思いの共感とネットワーク

さて、事業の3つの柱をご紹介したが、すべてを毎日できる場所として、2007年に仙台市榴岡児童館の指定管理者に応募。理由は仙台市の児童館設置理念と「せん杜」の事業理念が同じであったからだ。子どもたちが毎日集うことができる場所がある、これほどす

ばらしいものはないと思い、チャレンジの気持ちで思い切って選考委員会へ臨んだところ、7団体の応募の中から「せん杜」が指定管理者として決定され、現在3期目に入っている。2011年には新田児童館の指定管理も担い、今年より富谷市の2児童クラブ事業を受託した。

2011年3月11日、東日本大震災が襲ったのはご承知の通り。2児童館は地域の避難所となり、地域や学校と共に被災者の救援に当たった。大変な惨事の中、分かったことがある。児童館や「せん杜」だけではできない事がたくさんあるということ。「顔が見える関係」があったからこそ「阿吽」で地域と共に役割分担ができたということ。子どもとその家族を守るためには手を携えるべきネットワークがいかに重要であるかということだ。

大震災発災後、石巻市、仙台市内で被災地支援事業「杜の子まつり」を毎年実施している。現地で頑張っている諸団体や行政と共に、子どもたちとその家族が元気を取り戻し、一歩踏み出そうとする気持ちにつなげたい。ここで頑張っているのが中高生中心のジュニアリーダー、大学生そして神戸から応援に来る高大学生で、子どもたちのエネルギーがまつりを盛り上げている。

### なぜ、行うのか…。

大震災後、どうしてここまでやるのだろうか、ここまでやらなくてもいいのでは…、と理事会で話し合ったことがあった。でも、今だからやるべきだということになった。

大人としての責任にあったのだと思う。子育て中の親だった私たちは、子育て支援者の域に入っていることもあるが、やはりNPOの気概なのか、社会の課題解決を生真面目に捉える面が「せん杜」にはある。そして、決定的なのは共感できる仲間がいるこ

となのだろう、と。この仲間の存在が一番誇れるところだ。

### これからのためにすべきこと

近未来を考えると、AIや高度に発展し続けるメディア機器社会の中で子どもたちは生きていくことになる。大変便利になるからこそ、「子どもと大人が人間としての感性やお互いを認め合う心を育む」ことを醸成していかなければいけないと痛感する。人間だからこそ持ち得るコミュニケーション力や創造力、感性を豊かにしていくことこそ、子どもたちがたくましく生き抜いていく糧と言いたい。そして、面白い大人に出会う場をたくさん作っていきたい。

子どもたちや親が集う場づくりの中で、芸術鑑賞とママパライン仙台の活動には、広く社会からの応援を求めている。日本の寄付文化はこれから活発になると確信し、企業協賛もお願いしながら、勇気を持って「社会の応援団」を広げるべく行動していこうと思う。



子育て応援フェスティバル

